

特集

SDGsとメディアセンター

SDGsと大学・メディアセンター

しまだ たかし
島田 貴史

(メディアセンター本部課長)

1 はじめに

メディアセンターが年に1回実施している研修会の2021年度(第18回)¹⁾のテーマが“SDGsと図書館”で、同研修会での学びを活かして、メディアセンターがSDGsの目標に向かってどのように進んでいるかを観ることが本特集の意図である。一方、本企画を立ち上げるにあたって、SDGsと図書館の関係がわかりにくいとの声もあったという。そこで、SDGsと大学やメディアセンター(大学図書館)の関係について概観してみたい。

2 SDGsのわかりにくさ

(1) SDGsの認知度

SDGsの認知度は高まっている。朝日新聞が2017年から年に2回実施している「SDGs認知度調査」²⁾の第1回調査(2017年7月)では「SDGsという言葉を知っている」と回答した人の割合は12.2%だったが、2020年12月の第7回調査で54.3%、第8回(2021年12月)で77.8%、最新の第9回(2023年2月)では88.4%と、直近数年で認知度が上がっている。このことはSDGsに関する新聞記事の件数からも窺うことができる。表1は日経テレコンを2016年から2022年まで1年ごとに「SDGs」「SDGs×企業」「SDGs×大学」「SDGs×図書館」でヒットした記事件数を示す。全体に増加傾向だが、2020年から2021年で大きく件数を増やしている。朝日新聞の認知度調査と合わせると、2020年から2021年頃にSDGsへの一般の関心が広まったと考えられる。

一方、朝日新聞の調査ではSDGsの中身に関する理解が高くないことも示している。最新の第9回調査では、SDGsの認知度は9割近いが、SDGsが「持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals)の略語」だと「知っている」「聞いたことある」と

回答した人は7割、「17のゴール(目標)があること」で6割弱、「17のゴールの下にターゲット(小目標)があわせて169あること」を知っている人の割合は1/3程度にとどまっている。SDGsという名前は聞いたことがあるが、詳しい中身については知らないというのが平均的な理解度と考えられる。

表1 日経テレコンによる検索結果

使用キーワード	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022
SDGs	53	187	561	1,363	1,601	3,211	3,423
SDGs×企業	39	104	337	756	917	1,832	1,887
SDGs×大学	4	13	60	147	151	349	332
SDGs×図書館	0	0	1	8	7	22	27

(2) 図書館に関係のあるゴール

SDGsは地球環境の保全や誰も取り残さない社会の実現といった大きな視点を17のゴールで表しており、サイズ感としては、大学の図書館とは合わないように見える。実際、17のゴールの中から図書館に関係するゴールを見つけるのは簡単ではない。ゴール4(質の高い教育をみんなに)やゴール10(人や国の不平等をなくそう)はイメージしやすく、医学図書館のある大学はゴール3(すべての人に健康と福祉を)も思いつくであろう。ただし、より理解を深めるには17のゴールの下に設けられている169のターゲットに着目するのが良い。例えば、ゴール4の下にあるターゲット4.3³⁾は「2030年までに、全ての人々が男女の区別なく、手の届く質の高い技術教育、職業教育、及び大学を含む高等教育への平等なアクセスを得られるようにする」となっており、高等教育機関の一部を成す大学図書館へのアクセス(公開性)も対象になると考えられる。また、ゴール11(住み続けられるまちづくりを)の下にあるター

特集 SDGsとメディアセンター

ゲット11.7⁴⁾でも「2030年までに、女性・子供、高齢者及び障害者を含め、人々に安全で包摂的かつ利用が容易な緑地や公共スペースへの普遍的アクセスを提供する」としており、公共施設の代表格とも言える図書館へのアクセス（公開）を求めている。ターゲットを参照することで、図書館に求められる役割や機能を掴みやすくなる。ちなみに、ゴール11は大学図書館には大切なゴールである。ターゲット11.4は「世界の文化遺産および自然遺産の保全・開発制限取り組みを強化する」となっており、大学図書館の所蔵する文化的に貴重なコレクションやそのデジタルアーカイブを指していると考えられる。17のゴールをNDCの一次区分とし、169あるアジェンダを二次区分と捉えることで、SDGsが図書館スタッフにお馴染みの構造に思えるのではないだろうか。

(3) SDGsと大学

大学を取り巻く環境は近年厳しさを増している。例えば、政府等の公的機関からの財政的な支援が縮小され、各大学は財政の健全化を図るとともに、研究費や寄付金等を外部から獲得する必要に迫られている。もともと大学は研究者の自由な発想で研究を行う場であるが、外部からの協力や理解を得るには、研究力の高さや独自性だけでなく、大学の外で関心が寄せられている問題や課題の解決に大学の研究力が役立つことを証明する必要がある。

また、昔から有名大学への批判は多々あるが、通学する学生の家庭の所得が高いと言われる一部の大学に多額の奨学金が提供され、学生に占める女子学生の割合が4割を超えている大学がRU11の大学の中には1つもないという事実は、大学が特定の人々に有利な機関との印象を与えかねない。

社会への貢献度（インパクト）や大学のアカウントビリティの重要性に着目し、大学とSDGsの関係をいち早く整理したのが、世界大学ランキングのランカー企業として有名なTimes Higher Education（以下THE）社である。図1は同社が2019年から始めたSDGsに紐づけた世界大学ランキングであるTHE Impact Rankings（以下インパクトランキング）の説明資料としてよく用いられるもので、大学がSDGsに貢献できる4つの要素を示している⁵⁾。



図1 大学はSDGsをどのようにサポートするか

Researchは研究力のことで、SDGsの課題を解決する能力を指す。TeachingはResearchが生み出した知識や技術を学生だけでなく、市民や各課題のステークホルダーに移転することを指す。StewardshipはSDGsの課題解決に必要な人的、物理的なリソースを指しており、大学図書館はここに含まれる。4つ目のOutreachはNPOやNGOに地元のコミュニティ、地方や中央の政府、海外機関等との連携力である。SDGsの諸課題には単一の機関では解決できない多くの課題を含んでいる。そこで、ネットワークで課題に対応できる力が重視されている。THE社によるこの説明は大学とSDGsの関係を上手く表しており、同社のインパクトランキングに設定された220を超える設問（この数はSDGsの17のゴール、169のアジェンダの下に設定される232のインディケ이터（政策課題）の数に匹敵する）は、大学でのSDGsへの具体的な関与をイメージできる好事例⁶⁾となっている。実際の設問を見てみると、事務部門の多くの活動がSDGsと結び付いていることがわかる。

3 SDGsから学べること

この章では、本特集に寄せられた6つの記事に触れながら、SDGsから学べることを確認する。

(1) 連携力

大きな課題をネットワークで解決することは大学図書館でも実施されてきている。図書館相互貸借はその典型だが、ここ数年で大きな環境の変化を迎えている。本学でも購読費の高騰に伴い電子ジャーナルパッケージの契約中止を余儀なくされ、利用者の資料入手に関わる負担軽減を目的に諸費用の補助サービスを開始した。また、コロナ禍でのキャン

パス閉鎖に伴う資料の自宅への郵送サービスも経験している。さらに、近年に導入したILLシステム（RapidILL）が業務量の低減と迅速な資料提供の両立を可能にしている。三谷の報告は、ILLを取り巻く外部環境の変化に対応しながらサービスモデルを持続可能なものに変えてゆく取り組みである。

本学の図書館システムであるAlmaや前述のRapidILLは海外製品であり、本学が海外の情報をキャッチできている背景には海外との交流の歴史がある。本学の海外との交流は1960年代に遡るが、2000年以降だけでもRLG（米国の研究図書館グループ）やOCLC Researchへの加盟、Google Books Library ProjectとHathiTrustへの参画、OCLC Research脱退後の2020年にはPRRLA（Pacific Rim Research Libraries Alliance：環太平洋研究図書館連合）に加盟している。これらの団体への参加は海外の図書館との繋がりを求めているものだが、海外の図書館で特徴的な活動に携わっている人々からの直接的な刺激や示唆が、新しい取り組みやシステム導入への挑戦を可能にしてきた。その背景や現状、海外との交流に関するSDGsの観点からの考察を関口が行っている。

(2) 多様性の確保

私事だが、1年ほど前に右足に大怪我をした。幸いにも自己歩行できるほどに回復したが、まだ以前のように歩けない。身体に不自由さがあると見えてくるものがある。例えば、駅のエスカレータへの不満である。狭い場所には上りのエスカレータしか設置されていないことが多い。一方、足の悪い人の立場から言うと、階段は下りの方が足に負担がかかる。片足体重になるためである。したがって、上りのみ設置されているエスカレータは足の悪い人のためでなく、健康な人へのサービスであることがわかる。

多様性には、当事者の立場になってみないとわかりにくい部分がある。そして、本学のような研究型大学図書館では、研究者を主たる対象としてサービスを構築してきている。太田の報告は、図書館施設の観点からの報告となっている。また、大学図書館のミッションは研究と教育の支援にあり、教育支援はメインのトピックの1つとして扱われてきたが、日常は管理の対象として学生を捉える傾向があることは否定できない。今井と竹田の報告は「誰も取り

残さない」の観点から、教育支援サービスの最新事例を取り上げている。

(3) コンテンツ

SDGsに関係なく、大学図書館にとってコンテンツの提供は常に最重要の課題である。SDGsの文脈ではオープンアクセスが最大の関心事となろうが、それ以外にも大学図書館が注力できることはある。

竹内と山田の報告は、三田メディアセンターにおける資料保存とその活用に関する事例報告である。特にスペシャルコレクション資料のアウトリーチ活動に関する部分はSDGsの考えに沿うものである。遠藤・佐山・西崎は、信濃町メディアセンターの医学部図書館としての社会貢献を報告している。大学病院が患者に適切な医療情報を提供することへの関与は、図書館だけでなく、大学のアウトリーチ活動と言えるであろう。

4 まとめ

SDGsだからと言って特別に難しく考えることはない。SDGsから学ぶべき点は外部の視点であり、他者の視点である。それらの視点さえ意識すれば、図書館はSDGsの実現に十分に貢献できる。

参考文献

- 1) 慶應義塾大学メディアセンター、メディアセンター研修会。
<https://libguides.lib.keio.ac.jp/kenshu/kenshu21>
- 2) 朝日新聞、第9回SDGs認知度調査。
https://miraimedia.asahi.com/sdgs_survey09/
- 3) 外務省、4：質の高い教育をみんなに。
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/statistics/goal4.html>
- 4) 外務省、11：住み続けられるまちづくりを。
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/statistics/goal11.html>
- 5) Duncan Ross, Hannah Peacock, Impact Rankings 2024 Masterclass.
<https://www.timeshighereducation.com/sites/default/files/the-impact-2024-masterclass-sept-2023.pdf>
- 6) Times Higher Education, Impact Rankings 2023: methodology.
<https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings/impact-rankings-2023-methodology>